

【 第 140 聖詠 第 7 調 】



誦經) しゅよ わくち まもり おき わくちびる もん ふせ たま わ ころ よこしま ことば
 主よ、我が口に 衛を置き、我が 唇の門を 扞ぎ給え、我が心に 邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら
 に傾きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な なめざらん。ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い
 甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき
美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。

かれら しゅちょう いわお あいだ きん わ ことば にゅうわ き われら つち ごと き
彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く研り

くだ わ ほね ぢごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ
砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも
を恃む、我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし罟、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち
を其前に顯せり。我が靈の表に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ
る者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

なんぢ まえ つつし ため
の爾の前に敬まん爲なり。

しゅ われほうとう もの ごと なんぢ おんちょう はな じんじ とみ ついや じれん しゅ
主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主

なんぢ はし つ なんぢ よ かみ われつみ おか われ あわれ たま
よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

しゅ われほうとう もの ごと なんぢ おんちょう はな じんじ とみ ついや じれん しゅ
主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主

なんぢ はし つ なんぢ よ かみ われつみ おか われ あわれ たま
よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

いた さんび ちめいしゃ なんぢら にくたい きず まか はげ くらん くる し
至りて讚美たる致命者よ、爾等は肉體を傷つくるに任せ、烈しき苦難と苦しき死

とを忍びて、^{しの} 窘逐者^{きんちくしゃ}を辱^{はづ}かしめ、^{じつ} 實に偶像^{ぐうぞう}の尊^{とうと}きを滅^{ほろぼ}して、ハリストス^{ゆいいち} 唯一^{かみ}の神

及^{およ}び主宰^{しゅさい}を傳^{つた}えたり。^{こうえい} 光榮なる榮冠者^{えいかんしゃ}よ、^{いまなんぢら} 今爾等^{てんし}は天使^{ひんい}の品位^{とも}と偕^{かれ}に彼の^{まえ}前に

立^たち給^{たま}う。

③ 願^{ねが}わくはイスライリ^{しゅ}は主^{たの}を恃^{けだし}まん、蓋^{しゅ} 憐^{おおい}は主^{あがない}にあり、大^{かれ}なる贖^{あがない}も彼^{かれ}にあり、

彼^{かれ}はイスライリ^{そのことごと}を其^{ふほう} 悉^{あがな}くの不法^{あがな}より贖^{あがな}わん。

受難者^{じゆなんしゃ}よ、^{なんぢら} 爾等^{ちじょう}は地上^{たのしみ}の樂^{あい}を愛^{てんじょう}せずして、天上^{ふくらく}の福樂^えを獲^{しよてんし}、諸^{どう}天使^{どう}の同

住^{ちゆうしゃ}者と爲^なれり。^{しゅ} 主^{かれら}よ、^{きとう} 彼等^よの祈^{われら}禱^{あわれ}に由^{すく}りて我^{たま}等を憐^{たま}みて救^{たま}い給^{たま}え。

② 萬^{ばんみん}民^{しゅ}よ、主^ほを讃^あめ揚^あげよ、萬^{ばんぞく}族^{かれ}よ、彼^{あが}を崇^ほめ讃^ほめよ、

聖^{せい}致命者^{ちめいしゃ}の我^{われら}等^{ため}の爲^{いの}に祈^{うた}りてハリストス^{およそ}を歌^{まよい}うに、凡^やの迷^{ひと}謬^{やから}は熄^{ひと}み、人^{やから}の族^{ひと}は

信^{しん}を以^{もつ}て救^{すく}わる。

① 蓋^{けだし} 彼^{かれ}が我^{われら}等に^{ほどこ} 施^{あわれみ}す 憐^{おおい}は大^{しゅ}なり、主^{しんじつ}の眞^{なが}實^{そん}は永^{そん}く存^{そん}す。

致命者^{ちめいしゃ}の會^{かい}は窘逐者^{きんちくしゃ}に敵^{てき}して曰^いえり、我^{われら}等は萬^{ばんぐん}軍^{おう}の王^{へいし}の兵^{なんぢら}士^{ひおよ}なり、爾^{なんぢら}等^{ひおよ}火^ひ及^{およ}び

種^{しゅじゅ}種^{くるしみ}の苦^{われら}に我^{わた}等を付^{せいさんしゃ}すととも、聖^{ちから}三者^いの力^いを諱^いまざらん。

【 生神女讚詞 第2調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよおに、アミン。
何 時 世 世

おんちようきたりてほうりつのかげはされり、
恩 寵 來 法 律 影 去

けだしもゆるいばらのやけざりしごとお
蓋 燃 棘 焚 如

く、どうていぢよはうみしのちもながくどう
 童 貞 女 生 後 永 童

ていぢよな り、ほのおのはしらのかわりに
 貞 女 焰 柱 代

ぎのひはいでてひかある、モイセイのか代
 義 日 出 光

わありいにわがたましいのきゅうしゃハリストスはあ現
 我 靈 救 者

らわれたあり。

【 聖入 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにししてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
 聖 光 榮 穩 光

ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく暮
 我 等 日 入 至 暮

れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光 見 神 父 子 聖 神

をうとおう。いのちをたもうかみのこ
 歌 生 命 賜 神 子

よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何時 敬 虔 聲 歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故 世界 爾 崇
 ほむ。
 讚

【 第一の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) 謹みて聴くべし、衆人に平安、睿智、謹みて聴くべし。

誦經) プロキメン、第四の調、祈る、狹難に於て我等に助を昇え給え、人の護佑は虚

しければなり、

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ
 祈 狹難 於 我等 助 昇
 たえたまえ、ひとのまもりはむなしけれ
 給 人 護佑 虚
 ばなり。

誦經) 神よ、爾我等を棄て、爾我等を敗れり、

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ
 祈 狹難 於 我等 助 昇
 たえたまえ、ひとのまもりはむなしけれ
 給 人 護佑 虚
 ばなり。

誦經) 祈る、^{いの} 狹難に於て我等に ^{せまき} 助を昇え給え、^{おい} ^{われら} ^{たすけ} ^{あた} ^{たま}



ひと の ま も り は む な し け れ ば な り 。
人 護 佑 虚

司祭) 睿智、^{えいち}

誦經) 創世記の讀、^{そうせいき} ^{よみ}

司祭) 謹みて聽くべし、^{つつし} ^き

【 創世記 8章4～21節 】

誦經) 方舟は七月に至り、其月の十七日にアララト山に止まれり。水漸く減じ

^{じゅうがつ} ^{いた} ^{じゅうがつ} ^{ついたち} ^{やま} ^{みねあらわ} ^{しじゅうにち} ^へ ^{のち} ^{その}
て十月に至り、十月の朔に山の峯現れたり。四十日を歴て後、ノイ其

^{はこぶね} ^{つく} ^{まど} ^{ひら} ^{からす} ^{はな} ^{みづ} ^ち ^か ^{いた} ^{かけ}
方舟に作りたる窓を啓きて、鴉を放ちたれば、水の地に洶るるに至るまで、駟り

^{おうらい} ^{そののちかれ} ^ち ^{おもて} ^{みづ} ^{しりぞ} ^み ^{ため} ^{はと} ^{はな} ^{はと}
て往來せり。其後彼は地の面より水の退きしかを見ん爲に、鴿を放ちしに、鴿

^{そのあし} ^{とど} ^{ところ} ^え ^{かれ} ^{はこぶね} ^{かえ} ^{みづぜんち} ^{おもて} ^あ
は其足を止むる所を得ずして、彼に方舟に還れり、水全地の面に在りたればな

^{かれて} ^の ^{これ} ^と ^{はこぶね} ^{おのれ} ^{ところ} ^い ^{またなぬか} ^ま ^{ふたたびはと}
り、彼手を伸べて之を取り、方舟に己の所に入れたり。又七日を待ちて、再鴿

^{はこぶね} ^{はな} ^{はとくれ} ^{およ} ^{そのくち} ^{かんらん} ^{わかば} ^{ふく} ^{かれ} ^{かえ} ^{ここ}
を方舟より放ちしに、鴿暮に及びて、其口に橄欖の新葉を銜みて彼に還れり、是

^{おい} ^{みづ} ^ち ^{おもて} ^{しりぞ} ^し ^{さら} ^{またなぬか} ^ま ^{はと} ^{はな}
に於てノイ水の地の面より退きしを知れり。更に又七日を待ちて、鴿を放ちし

^{またかれ} ^{ところ} ^{かえ} ^{ざいせい} ^{ろくひやくいちねん} ^{いちがつ} ^{がんじつ} ^{みづち} ^か
に、復彼の所に還らざりき。ノイ在世の六百一年の一月の元日に水地に洶れ

^{つく} ^{ところ} ^{はこぶね} ^{おおい} ^{ひら} ^{みづ} ^ち ^{おもて} ^か ^み ^{にがつ}
たり、ノイ作りし所の方舟の蓋を啓きて、水の地の面に洶れたるを視たり。二月

^{にじゅうしちにち} ^{いた} ^{ちかわ} ^{しゅかみ} ^い ^い ^{なんぢおよ} ^{なんぢ} ^{つま}
の二十七日に至りて地乾きたり。主神はノイに謂いて曰えり、爾及び爾の妻、

^{なんぢ} ^{しょしおよ} ^{なんぢ} ^{しょし} ^{つま} ^{とも} ^{はこぶね} ^い ^{なんぢ} ^{とも} ^あ ^{およそ} ^{けもの}
爾の諸子及び爾の諸子の妻、共に方舟より出づべし、爾と偕に在る凡の獸、

^{およ} ^{およそ} ^{にく} ^{とり} ^{かちく} ^{いた} ^{およ} ^{およそ} ^ち ^は ^{もの} ^{おのれ} ^{とも} ^ひ ^{いだ}
及び凡の肉、鳥より家畜に至るまで、及び凡の地に匍う者を己と偕に引き出

^{これら} ^ち ^{さん} ^ち ^{うえ} ^う ^{かつふ} ^{ここ} ^{おい} ^{およ} ^{そのつま} ^{そのしょし}
せ、此等は地に散じて、地の上に生み且殖ゆべし。是に於てノイ及び其妻、其諸子、

^{そのしょし} ^{つま} ^{とも} ^い ^{およそ} ^{けもの} ^{およそ} ^{かちく} ^{およそ} ^{とり} ^{およそ} ^ち ^は ^{もの}
其諸子の妻、共に出でたり、凡の獸、凡の家畜、凡の鳥、凡の地に匍う者、

そのるい したが はこぶね い しゅ ため さいだん きづ およそ きよ かちく
其類に 従いて 方舟より出でたり。ノイは主の爲に祭壇を築き、凡の潔き家畜

およ およそ きよ とり と ほんさい だん うえ さき しゅ そのこうば かおり う
及び凡の潔き鳥より取りて、燔祭を壇の上に獻げたり、主は其馨しき香を享
けたり。

【 第二の提綱 】

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) プロキメン、第六の調、神よ、我が籲ぶを聴き、我が祈を聴き納れ給え、

か み よ 、 わ が よ ぶ を き き 、 わ が い の り を
神 我 籲 聴 我 祈
き き い れ た ま あ え 。
聴 納 給

誦經) 我地の極より爾に呼ぶ、

か み よ 、 わ が よ ぶ を き き 、 わ が い の り を
神 我 籲 聴 我 祈
き き い れ た ま あ え 。
聴 納 給

誦經) 神よ、我が籲ぶを聴き、

わ が い の り を き き い れ た ま あ え 。
我 祈 聴 納 給

【 祝福 】

司祭) 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) 箴言の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

【 箴言 10章31節～11章12節 】

誦經) 義者の口は智慧を流し悪者の舌は断たれん。義者の唇は悦ぶべきことを知り、
悪者の口は戻れることを語る。詐偽の權衡は主の悪む所、正しき重量は其悦ぶ
所なり。驕傲來れば耻辱も亦來る、謙る者と偕に智慧あり。義者は死して痛惜
を遺し、悪者の滅は俄にして喜悦を致す。正直者の端莊は彼等を導き、悖逆
者の邪曲は彼等を滅さん。貨財は震怒の日に益なし、惟義は死より救わん。
無玷者の義は其途を坦にし、悪者は其惡に因りて跌れん。正直者の義は彼等を
救い、不法の者は其不法に因りて執えられん。義人は死して後其望絶えず、不法
の者の望は亡ぶ。義者は艱難より救われ、悪者は代りて之に陷る。貳心の者
は口を以て其鄰を亡し、惟義者は知識に因りて救わる。義者幸福を獲る時は邑
楽しみ、悪者亡ぶる時は歡あり。義者の祝福に因りて邑は高くせられ、悪者
の口に因りて圮さる。智慧なき者は其鄰を侮り、智慧ある人は緘黙を守る。

※ 願わくは我が禱は、、、へ